佐々木望作「家族II」

＜前編「寂しん坊」＞

（効果音）　（朝食風景。食器の音）

谷口静江（和也の母）　和也、早く食べて出かけないと、また遅刻するわよ。

谷口武雄（和也の父）　お前、そんなに遅刻が多いのか？

谷口和也　えー、たまにだよ、たまに。ねえ、弁当は？

静江　とっくにできてますよ。

谷口浩子（和也の姉）（寝ぼけた声で）ファー（あくび）おはよう。

静江　浩子、いつまで寝てるの？　学校は？

浩子　今日は 1、2 限休講だもん。そのあとしっかりお勉強いたします。

和也　大学生はいいご身分だぜ。毎日遊び歩いてるくせに。

浩子　その“いいご身分”からアルバイト料せびるのは、もっといいご身分じゃない。

静江　和也、あなたそんなことしてるの？

和也　おっとヤバい。はいお弁当、お弁当と。じゃ行ってきます。

和也ナレーション　僕、谷口和也。青春高校 2 年生。我が家は商社マンの父と、おふくろ、それに大学 2 年の姉の浩子の 4 人家族。おやじは猛烈に忙しくて、父親らしいことをしなかったため、。姉貴は中学 3 年のころからツッパリだして、冷戦状態が続いている。姉貴は、早くバイトで金ためて、独立したいらしい。でも僕は、小さいころから結構両親にかわいがられたし、僕としては、まあまあ満足。いい家庭だと思っている。いや、思い込んでいた、つい最近までは。

（効果音）　（始業前のクラスのガヤ）

女生徒 1（広美）　ねえねえ、隣のクラスの転校生さぁ。

女生徒 2　え？　ああ、あのちょっと暗い感じの子ね。

女生徒 1　そうそう。何で暗いと思う？

女生徒 3　そんなの分かるわけないじゃん。

女生徒 2　何よ。早く言って。

女生徒 1　何でも、お父さんとお母さんが離婚しちゃったんだって。

女生徒 3　へー、かわいそうねぇ。親の一方的な都合でねぇ。

女生徒 2　それにしても、広美、よくそんなこと知ってるわねぇ。

女生徒 3　そりゃあ広美のお母さんは町内の情報発信地だもの。

女生徒2　じゃあ、広美のうわさ好きは遺伝だね。

女生徒 1　何それ。でもさぁ、その離婚の原因ってのがね、…。

女生徒 3　ほらほら、また始まった。（3 人笑い）

和也（モノローグ）　そうか、あの子、話したことはないけれど、なんとなく“暗い子だなぁ”とおれも

感じてたけど、両親が離婚かぁ。そんなこと、結構身近にあるもんなんだなぁ。

ナレーション　この時、まさか自分の家族にもその危機が迫っていたなんて、僕は夢にも思わなかった。

（音楽）　（暗い予感）

ナレーション　それは、転校生のうわさも忘れてしまったある夜のことだった。

モノローグ　あー、のどが渇いて眠れないなぁ。冷蔵庫に何かあったかなぁ。

（効果音）　（階段を下りて台所へ。冷蔵庫を開ける。）

モノローグ　あった。ジュースか。

（効果音）　（缶ジュースを開けて飲む音。）

武雄・静江　（オフ）（かすかな話し声のアドリブ）

モノローグ　あれ、おやじたち、まだ起きてるのか。

（効果音）　（居間の食器の割れる音）

静江　（フィルター音）（泣き声で）あたしのことを 2 年間もだまし続けてきたんですね。

（効果音）　（ドアが開き、居間から飛び出してきた静江と和也、鉢合わせ。）

静江　和也…。

和也　お、お母さん…。

（効果音）　（静江、そのまま泣きながら寝室へ走り去る。）

和也　お父さん、どうしたの？

武雄　なんでもない。

和也　でも、お母さん、泣いてたよ。

武雄　なんでもないって言ってるだろう！

和也　…

武雄　あ、すまない。本当になんでもないんだ。ちょっとケンカしただけだから。気にしないで早く寝なさい。

ナレーション　そう言われても、ただ事でないことは僕でも分かる。その証拠に、それ以後、家族の中が妙にギクシャクしてきた。って言うよりも、みんながよそよそしくて、まるで他人が一緒に住んでるみたいだ。会話もめっきり途絶えてしまい、その重苦しい雰囲気に、家にいるのが正直つらくさえなってきた。おまけに、もともと出張の多かったおやじだが、近ごろは月の半分はうちに帰らない。おふくろはおふくろで、夜中に独りで酒を飲み始めた。

（効果音）　（グラスで水割りを作る音。独り、酒を飲む静江の隣に、和也が座る）

和也　ねえお母さん。体によくないから、もうそのぐらいにしなよ。

静江　（少し酔いながら）そうね。でももう一杯だけいいでしょ。

（効果音）　（グラスに酒を注ぐ音）

和也　もうダメだったら。（グラスを取り上げる。）

静江　ねえ、お願い。もう一杯だけ…。（次第に泣き声）もう一杯だけ…。（むせび泣

き）お願い、お母さんにはお酒しかないんだから…。

ナレーション　僕はいたたまれない思いで、2階の姉貴の部屋に行った。

（効果音）　（ドアのノック）

和也　お姉ちゃん、いないの？

ナレーション　普段はだらしないようで、いざと言うとき、この姉貴はなかなか頼りになる。

（効果音）　（再びノック）

和也　お姉ちゃん、入るよ。

（効果音）　（浩子、ヘッドホンで音楽を聴いている。和也を見てスイッチを切る。）

浩子　和也、ああ驚いた。レディーの部屋に入るには、まずノックぐらいしろ。

和也　何がレディーだ。ちゃんとノックしたよ。ヘッドホンで聞こえなかったんだよ。

浩子　あ、そっか。それで…またお姉さまのアルバイト代のおこぼれを頂戴しに来たの？

和也　そんなんじゃないよ。もっと深刻なこと。

浩子　へー、お前にも深刻なことがあるのか。

和也　お姉ちゃんも分かってるだろう。一体うちの家族はどうなっちゃったんだよ。

浩子　何言ってんのよ、今更。親だなんてあんまし考えたことないもん。

和也　お姉ちゃんがツッパってんのは知ってるよ。問題はおやじとおふくろだよ。

浩子　ん？　まあ、バラバラプッツンってとこかな。

和也　そんなことは分かってるよ。どうしてそうなっちゃったのかって聞いてるんだよ。

浩子　お前、本当に知らないのか？

和也　だから聞いてんだろう。

浩子　お前は本当に“純粋培養”だな。

和也　なんだよ、それ。

浩子　小さい時から、大事に大事に育てられてきたってこと。あたしが親の期待を裏切り続けてきたから。その分和也は、“いい子いい子”されてきたんだと思うけどね。

和也　だから何？

浩子　だから、お前は知らなくてもいいの。

和也　そんなことないよ。おれだって知る権利はあるだろう。それにこのまま、ただ黙って我慢してるなんてできないよ。

浩子　それもそうね。仕方ない、いつか分かることだし。いいかい、要するに“夫婦の危機”ってことよ。

和也　“危機”って、つまり…。

浩子　そう、つまり危ないってこと。原因は、月並みだけど、うちのおやじ殿の浮気。それがおふくろさんにバレて、すったもんだの挙げ句、こんな風になったわけ。

和也　…どうすればいいんだろう。

浩子　　どうもこうもないわよ。あたしには関係のないことだから。巻き込まれるのはごめんだね。

和也　　何言ってんだよ。よし、じゃおやじのやつに謝らせよう。

浩子　　バカ。そんなことできると思う？　いい大人が「悪いことだから、すぐやめて謝れ」って子供に言われてやめるぐらいなら、最初っからしやしないわよ。

和也　　そんなこと言ったって、おやじが浮気さえしなければ、こうはならなかったんだぜ。

浩子　　だからお前は純粋培養だって言うのよ。第一、おやじさんが浮気をした原因はなんだと思う？

和也　　そんなこと知るかよ。

浩子　　２年間も、おふくろさんは気づかなかったのよ。おかしいと思わない？

和也　　そりゃそうだけど…。

浩子　　おふくろさんはねぇ、あんたが生まれてからこの方、あんたに付きっ切りで、おやじさんのこと、ほっぽっといたんだからね。あたしだって寂しかったもん。

和也　　それって、お姉ちゃんが中学、高校時代に荒れてた原因？

浩子　　別にお前のことを恨んでなんかいないよ。とにかくそういうことだ。我が家はみんな“寂しん坊”。おやじさんが、うちに居着かなかったのも、おふくろさんが構ってくれなくて、寂しかったせいもあるね。ま、あたしに言わせりゃ、どっちもどっちだけど。で、“いくらなんでも”とおふくろさんが気づいた時は、おやじ意図相手の女は深い中。――そういうこと。

和也　　“そういうこと”ったって、どうするんだよ。

浩子　　どうもしないわよ。

和也　　ただ黙って見てるの？

浩子　　そうするっきゃないよ。

和也　　だって僕たち家族だろう？

浩子　　それでもこれは夫婦のことなんだから、おやじさんとおふくろさんで解決してもらわなければいけないの。

和也　　解決って？

浩子　　さあ。おやじさんが女と別れるか、現状維持か、ま、なるようにしかならないね。最悪の場合は離婚かな。

和也　　何のんきなこと言ってんだよ。そうなってもいいのかよ。

浩子　　よくはないけど、しょうがないでしょう。和也もそのときのことを考えて、身の振り方考えといたほうがいいよ。

和也　　それじゃ話にならないよ。結局お姉ちゃんも家族のことなんかどうでもいいんだ。自分だけがかわいいんだろう。もう相談しないよ。

（効果音）　　（バタンとドアを閉めて出て行く。）

浩子モノローグ　全く、単細胞のバカ。あたしだって、こうでも考えなきゃ、こんなこと耐えられないじゃないか。

ナレーション　僕が飛び出したあとで、こういって姉貴が唇をかみ締めていたことを、両親のことで頭が混乱していた僕は知る由もなかった。

和也モノローグ　一体うちの家族はどうなっちゃうんだろう。それに、こんな状態になるまで着月かなった自分にも、すごい嫌悪感。もう何もやる気がなくなった。これからどうすればいいんだろう。どうすれば？……

＜後編「愛のきずな」＞

ナレーション　あれからしばらくして、おやじは浮気の相手とはどうやら別れたらしい。でも家の中は相変わらず、冷たい透き間風が吹き抜けているようだ。おふくろは決しておやじを赦(ゆる)そうとはしないし、おやじはおやじで心から謝る気はないらしい。何もかもがイヤになる。最近はおふくろの深酒もひどくなった。僕はどうしようもないいら立ちで、勉強も手につかず、成績も目に見えて落ちていった。

（効果音）　（終業のチャイム。ガヤ）

先生　これで今日のホームルームは終わり。えーと、谷口。

和也　はい。

先生　掃除が終わったら職員室へ来てくれ。

和也　はい。

（効果音）　（ガラガラ職員室の戸が開く。）

和也　先生、なんでしょうか。

先生　ああ谷口。まあ座れ。お前、最近少しヘンじゃないのか？　ほかの先生からも、「どうもこのごろ谷口は授業に身が入ってないようだから、注意するように」と言われてね。どうなんだ？

和也　いえ、なんでもありません。

先生　なんでもないことはないだろう。特に、今までまじめだった谷口が、急に何か無気力になってしまったようで、心配してるんだぞ。欠席も多いし、成績は下がったし。一体何があったんだ？　遠慮しないで先生に言ってごらん。

和也　いえ、先生、本当に何もないんです。大丈夫ですから。ちょっと体の具合が悪かっただけですから。以後気をつけます。

先生　本当にそうならいいが、もし何か相談したいことがあったら、いつでも来なさい。

和也　はい、分かりました。失礼します。

（効果音）　（戸の開閉の音）

ナレーション　その日の放課後、家に帰る僕を遠くから呼び止める声がした。

中村信恵　（オフ）ねえ、和也君、ちょっと待ってよ。

ナレーション　それはクラスメートの中村信恵だった。彼女の父は牧師で、僕の父とはいとこ同士。僕は小さいころから「おじさん」と呼んでいた。

信恵　（オン。荒い息遣い）ふー、やっと追いついた。ねえ、あたしの声、聞こえなかったの？

和也　聞こえたさ。

信恵　ひどいな。それなら立ち止まってくれてもいいでしょう？
和也君、職員室呼ばれてたでしょう。どうしたの？

和也　別に。大したことじゃないよ。

信恵　ほんと？　それにしても、最近の和也君、ヘンよ。何かあったの？

和也　ちぇ。先生と同じこと聞くなよな。

信恵　やっぱりねえ。それでどうなの？　なんかあるんでしょう？　話してみてよ。

和也　話したら、お前、解決してくれるのか？

信恵　そんなの聞いてみなければ分からないでしょう？

和也　ほら見ろ。人の困っているのをみて哀れみたいだけだろう。やっぱりお前、牧師の娘だな。その才能には長（た）けてるってわけだ。

信恵　そんな言い方ってないでしょう。言っていいことと悪いことがあるのよ。

和也　ああそう。ケンカするのもバカらしいや。あ、もう家だ。じゃあな。

（効果音）　（門を開ける音）

信恵　ねえ、ちょっと待ってよ。ねえ、和也君。

ナレーション　呼び止める信恵の声を背に、僕は足早に家の中に駆け込んだ。幼なじみの彼女は、小さいころからいつも僕を誘って、教会学校やキャンプに連れていったり、何くれとなく気を遣ってくれたが、今の僕には、その信恵の思いやりも煩わしかった。

（効果音）　（目覚まし時計のベルの音）

和也　うーん。もうこんな時間か。（起きて居間に行く。）あれ、まだだれも起きてないな。そうか、おやじはゆうべ会社に泊まりこみか。おふくろさんはまだ寝てるのかな。珍しいな、こんなこと。（間）あれ、部屋が空いてる。よし、起こしてやろう。
ん？　なんだ、これは？

（効果音）　（手紙を広げる音）

和也モノローグ　（手紙を読む）「あなた、浩子、和也、ごめんなさい。わたしはもう生きていけません。」…た、大変だ！　（姉の部屋に駆け込み）お姉ちゃん、お姉ちゃん、早く起きて！　早く！

浩子　何よ、騒々しい。

和也　た、大変だよ。お母さんが、お母さんが…自殺…。

浩子　え？　（すぐ起き上がり、母の寝室へ）お母さん！　お母さん！　まだ息がある。
和也、救急車！

和也　　え？
浩子　　早くしなさい！
（効果音）　　（救急車のサイレン。近づき、母を担架に乗せると、再びサイレンと共に走り去る。）
ナレーション　　それからの 1 時間あまりを、僕はほとんど覚えていない。気がつぃたら僕は、姉と 2 人、病室の前の廊下のイスに座っていて、目の前には、中村信恵と彼女の父が立っていた。
信恵　　和也君。
和也　　信恵。どうしてここに？　それからおじさんも…。
信恵　　どうも気になって、朝和也君の家に寄ったら、あの騒ぎで、あなた、救急車に乗り込む時、ここに来てって声かけたじゃない。
和也　　ほんと？
信恵　　よっぽど気が動転してたのね。無理もないけど。
中村昇（信恵の父）　で、お母さんの容体は？
和也　　ええ、まだお医者さんが入ったきり、出てこないんです。
昇　　大丈夫、きっと助かるよ。
（効果音）　　（和也の父、武雄が走ってくる。）
武雄　　あ、これは中村先生と信恵さん。どうも。で、和也どうなんだ、母さんは？
和也　　分かんないよ。どうなるか分かんないよ。
武雄　　そうか。…全くとんだことをしてくれたもんだ。
和也　　お母さんが、お母さんが死ぬかもしれないのに、それしか言うことがないのかよ！
武雄　　なんだ、それが親に向かって言う言葉か！
和也　　それでも親かよ！
（効果音）　　（和也、いきなり父を殴りつける。倒れる父。）
昇　　和也君！
信恵　　ねえ和也君、やめてよ。
和也　　離せ！　親の責任も果たせないくせに、親ヅラするな！
（効果音）　　（病室のドアが開く。）
医師　　ここは病院です。静かにしてください。
武雄　　申し訳ありません。先生、それでいかがでしょう？
医師　　ええ、やるべきことはやりましたが、かなり多量に飲んでますから、今のところはなんとも。
武雄　　そうですか…。
医師　　もう少し遅れたら助かりませんでしたが、まあ、今日いっぱいが峠でしょう。できるだけのことはやりますから。

和也　先生、母を助けてください。お願いします！
武雄　よろしくお願いします。
昇　さ、信恵はもう学校へ行きなさい。ただしこのことはしゃべらないようにね。
信恵　うん、分かってるよ。じゃ和也君、神様がついてる。お母さんきっと治るわ。元気出してね。
昇　和也君。少し外を歩かないか？
和也　ええ。
ナレーション　僕は中村の叔父さんと2人、病院の中庭を歩いた。さっきのことがなんとなく後ろめたかった。
和也　叔父さんは牧師だから、「おやじを殴ったことはいけない」って言いたいんでしょう。
昇　暴力はいいこととは言えないけれど、それよりわたしはその理由のほうを知りたいな。ま、掛けるか。
和也　ええ。（ベンチに座る）実は…。
ナレーション　僕は、そばのベンチに座ると、それまでだれにも言えなかった、これまでの一部始終を、すべて信恵の父に話した。
昇　…そうだったの。君の、お父さんへの怒りも分かるね。
和也　そうでしょう。おやじだけじゃなくて、みんな自分勝手でバラバラなんです、うちの家族は。愛のひとかけらもないんです。
昇　そう。で、“自分勝手で愛のひとかけらもない”家族の中で、君もその一員ってわけだね。
和也　え？
昇　自分だけ例外にはできないだろう。
和也　ええ、まあ…。そうすると僕も自分勝手で、愛のひとかけらもないってことになりますね。
昇　うん。人間はだれでも愛を必要としている。けれどみんな愛されることばかりを求めている。お父さんも、お母さんも、お姉さんもそうだと思うよ。和也君も、家族から愛されることを求めているんじゃないのかな？
和也　そうですね。でも、愛されることを求めるのは、家族の一員として、と言うより人間として、当たり前なんじゃないですか？
昇　確かにそうだね。でも、みんなが愛されることだけを求めたらどうなるだろうか。
和也　愛されるだけだったら…。愛する人がいないから、結局だれも愛されませんね。
昇　そのとおりだよ。君の家族に愛のひとかけらもないと言ったのは、つまり、みんなが愛されることばかりを求めていたから、だれも進んで愛そうとしなかったか

らじゃないかな。

和也　叔父さん、“愛する”って一体どういうことなんですか？

昇　うん。ある人はこんなことを言っているね。「愛とは、一番大切なものを人にあげてしまうことだ」と。

和也　叔父さん、でもそれは難しいですね。叔父さんはできるんですか？

昇　いや、残念ながら自分の力ではできない。人間は、わたしも含めて、徹底的に自分中心で愛のない者だからね。でも、“本当に愛された”という体験をしたときに、初めて自分も人を愛することができるようになるんだ。

和也　ああ、それって、以前言ってた教会学校を思い出したけど、イエス・キリストが、僕たちの罪の身代わりに、十字架で命を捨てたってことでしょう？

昇　そのとおりだよ。

和也　一番大切なものって“命”だから、それを与えることこそ、本当の愛ってことになりますよね。でも、僕は家族ですら愛することができないで、憎しみでいっぱいなのに、他人のために命を捨てるなんて、信じられないな。

昇　うん。信じられないような大きな愛だね。でも、この十字架の愛は、和也君のためでもあるんだ。お父さん、お母さん、浩子さんのためにも今、このイエス様の愛が必要なんじゃないかな。

和也　それを信じれば、僕の家族は変わるんですか？

昇　変わるとも。本当の愛、それは神様の赦しの愛だ。自分を中心に愛を求める心は、裏を返せば、それを与えてくれない人を憎み、裁く心じゃないかな。神様の前に素直な心になって、一人一人が神様の赦しの愛を受け入れたら、家族の中に、本当の愛のきずなが生まれてくると思うよ。

ナレーション　初めて聞いた叔父さんの話は、何かあまりにも大きくて、深くて、僕の頭の中はかなり混乱していた。でもその中に、不思議な期待と、ある種の興奮があって、心の中はあったかいもので満ちていた。

僕は病室に戻ると、まるで見えない声に促されるように、父の前で素直に頭を下げた。

（効果音）　（病室のドアを開ける音）

和也　お父さん、さっきはごめんなさい。

ナレーション　それからあとに起こったことを、僕は決して忘れない。父はこう言ったのだ。

武雄　いや、いいんだ。父さんのほうこそ、これまでのことを謝らなければならない。和也、浩子、すまなかった。（間）しかし、和也の一発は効いたな。痛さも痛かったが、なんだかハッと目が覚めたような気がしたよ。実は…、父さん、お母さんがもし助かったら、お母さんに謝ろうと思う。もしお母さんが赦してくれたら、やり直そうと思うんだが。

浩子　大丈夫よ、お父さん。お母さん、ずっとそれを待っていたんだから。

和也　　あ、お母さんのまぶたが動いた。お母さん！

武雄　　静江！

浩子　　お母さん！

ナレーション　　ははうっすらと目を開けた。僕はその瞬間、“イエス様が命を捨てて、この母の命を戻してくれた”と思った。なぜだか知らないけど、“絶対そうだ”と僕は思っていた――。

＜完＞